イザヤ書66章 「新しく生まれるエルサレム」

1A みことばにおののく者 1－5
2A 母に慰められるエルサレム 6－14
1B 一日で生まれるシオン 6－9
2B 乳房から飲み、かわいがられる者 10－14
3A 主の来臨 15－21
1B 火による裁き 15－17
2B 逃れた者たちの宣教 18－21
4A 新天新地 22－24

本文

イザヤ書 66 章を開いてください。ついに私たちは、イザヤの預言の最後の部分を読みます。早速ですが、中身に入っていきたいと思います。

1A みことばにおののく者 1－5

1 主はこう言われる。「天はわたしの王座、地はわたしの足台。 あなたがたがわたしのために建
てる家は、いったいどこにあるのか。わたしの安息の場は、いったいどこにあるのか。2 これらすべ
ては、わたしの手が造った。それで、これらすべては存在するのだ。 ――主のことば―― わたしが
目を留める者、それは、貧しい者、霊の砕かれた者、わたしのことばにおののく者だ。

私たちは、これまで患難の中にいる、イスラエルの残りの民の祈りと、それに応答される主のことばのやり取りを読んできました。その始まりに、主が、彼らが断食して主を求めているのに、なぜそれを認めてくださらないのか？と訴えている時に、断食をしても正しい行いをしていないのであれば、無意味であることを主は語られました。そして、「わたしの好む断食とはこれではないか。（58:6）」と言われて、それで、憐れみの行いをすることなのだと言われています。

ここでも同じような問いかけをしています。それは、神殿礼拝に対する信頼です。神殿に主がおられるから、それで救いが来ると思っている、その期待が間違っていることを指摘しておられます。

ここの主のことばは、神殿を建てたソロモン自身が語ったことばそのものです。神殿を奉献する時の祈りで、彼はこう言いました。「Ⅰ列王 8:27 それにしても、神は、はたして地の上に住まわれるでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして私が建てたこの宮など、なおさらのことです。」ステパノが、サンヘドリンで裁判を受けていた時に、このことを言及したのを覚えていますか？彼はここのイザヤの預言を引用したのです（使徒 7:48-50）。そして、

彼らが、うなじを固くする、心と耳に割礼を受けていない人たちと彼らを呼び、聖霊に逆らっていると責めました。それで、彼らはステパノを石で打ち殺しました。

終わりの日に、黙示録 11 章を見ますと、患難時代に神殿が建てられています。ダニエル 9 章によれば、獣が最後の第七十週で多くの者と契約を結び、それが神殿のいけにえについてのことです。ですから、神殿が再建されるのですが、それは週の半ばで獣がその中に入り、自らを神と宣言する神殿になるのです。ですから、これは偽物であるとして、黙示録 11 章には二人の証人が現れて、預言をします。

そこで大事なのが、みことばを聞いて、恐れおののくことです。神殿礼拝が形だけのものとなってしまい、主のみこころの中心である、神のことばに聞いて、そこに応答するということを取り上げておられるのです。私たちも、教会の礼拝やそのほかの活動自体が中心になって、心や思いがそこから離れる、ということが起こりかねません。そうではない、みことばにおののくことです。そして、心を貧しくし、霊を砕いていただきます。

3 牛を屠る者が、人を打ち殺す者。羊をいけにえにする者が、犬の首を折る者。穀物のささげ物を献げる者が、豚の血を献げる者。乳香を記念として献げる者が、偶像をたたえる者。実に彼らは自分の道を選び、そのたましいは忌まわしいものを喜ぶ。

神殿礼拝に期待を置いている者たちが、みことばにおののいていない証拠が、ここにあります。牛は屠っているのです。でも、行いでは人を打ち殺しています。羊のいけにえを神殿で献げているのですが、同時に犬の首を折っているのです。犬は汚れた動物とみなされていますから、これは異教の慣わしで行っていることです。同じように、穀物の献げ物を神殿でしているのに、豚の血を異教の神に献げています。同じようにして、乳香を記念として献げているのに、偶像礼拝をしているのです。それが自分の道を選び、魂が忌まわしいものを喜んでいる証拠です。

私たちも、礼拝や他の宗教的活動に熱心でありながら、神を知らない人々と同じようなことを喜び、忌まわしいことをしているという、二心になることは容易にあることです。

4 わたしも彼らを厳しく扱うことを選び、彼らに恐怖をもたらす。それは、わたしが呼んでもだれも答えず、わたしが語りかけても聞かず、わたしの目に悪であることを行い、わたしの喜ばないことを選んだからだ。」

主に心を頑なにしている人には、主は、彼らがたとえイスラエル人であったとしても、厳しく扱われます。

5 主のことばにおののく者たちよ、主のことばを聞け。「あなたがたを憎み、わたしの名のゆえにあなたがたを押しのける、あなたがたの同胞は言った。『主に栄光を現させよ。おまえたちの楽しみを見てやろう』と。しかし、彼らは恥を見る。」

患難の時でさえ、このように仲間による迫害があります。主のことばを尊び、みことばにおののいている者たちが、世に妥協している者たちによって、あざけられている姿です。同じイスラエル人でも、肉によって生きている者が御霊の者たちを迫害することについては、パウロもガラテヤ書で論じていることです。イシュマエルがイサクをからかったことから、こう述べています。「4:29 けれども、あのとき、肉によって生まれた者が、御霊によって生まれた者を迫害したように、今もそのとおりになっています。」しかし、彼らこそが恥を見ると言っています。

キリスト教会においても、みことばに忠実に生きようとする者にとって、外の世の人たちよりも、教会の世界の、妥協している人々による圧迫のほうが深刻だということは、よくあります。

2A 母に慰められるエルサレム 6－14

しかし、患難期によって、イスラエル人たちの間で反逆者は選り分けられ、彼らは滅びます。残りの者たちが主を求める中で、主が戻ってこられて、ついにオリーブ山の上に立ちます。地殻変動が起こり、それからエルサレムが再建されるのです。その様子を、母親から、すみやかに産まれた赤ん坊に喩えています。

1B 一日で生まれるシオン 6－9

6 都から騒ぎが、宮から声が聞こえる。敵に報復する主の御声が。7「彼女は産みの苦しみが来る前に産み、陣痛が来る前に男の子を産み落とす。8 だれが、このようなことを聞き、だれが、これらのことを見たか。地は一日の苦しみで産み出されるだろうか。国は一瞬にして生まれるだろうか。ところがシオンは、産みの苦しみと同時に 子たちを産む。

主は、患難の苦しみを、産みの苦しみに喩えておられます。イエスご自身も、オリーブ山で、産みの苦しみの始まりについて語っておられましたね。出産の時が来ます、その時は苦しみが一気に、喜びに変わります。それが、終わりの日、主が来られたら、エルサレムが一気に生み出されて、新しくされることを教えています。時間がかからないのです。エルサレムの再建のため、かつて、バビロンから帰還した者たちは、時間をかけて神殿と城壁を再建しました。しかし、メシアが来られる時は、そんなことはないのです。すみやかに、回復させてくださいます。

この終わりの日の幻を垣間みるようなことが、すでに前世紀に起こりました。ユダヤ人が世界から帰還して、ユダヤ人共同体が生まれて、それで 1948 年 5 月 14 日に独立宣言をして、イスラエルが建国しました。一日のうちに国が生まれました。そして 67 年には六日戦争によって、エルサ

レムの旧市街、オリジナルのエルサレムが解放されました。一日で、何千年も待っていたことが、一気に起こるという奇跡です。

9 わたしが胎を開きながら、産ませないだろうか。 ――主は言われる―― わたしは産ませる者なのに、胎を閉ざすだろうか。 ――あなたの神は仰せられる。」

ここに主のみこころがあります。強い意志があります。主は、イスラエルに約束されたのですから、必ず果たすことを、胎を開きながら、産ませないということはないという言葉で表現しておられます。

2B 乳房から飲み、かわいがられる者 10－14

10 エルサレムとともに喜べ。すべて彼女を愛する者よ、彼女とともに楽しめ。すべて彼女のために悲しむ者よ、彼女とともに喜び喜べ。

主は、「シオンのためにわたしは黙っていない。（61:1）」と言われました。そして、「主を休ませてはならない。主がエルサレムを堅く立て、この地の誉れとするまで。（62:7）」とも言われました。そして今、エルサレムが堅く立てられています。そこで、ともに喜びなさいと呼びかけているのです。今までは、エルサレムために悲しんでいたけれども、今は喜び喜べと呼びかけています。イエスも、山上の説教で、悲しむ者は幸いである、慰められるからと言われましたね。主のゆえに悲しむ者たちが、報われて喜ぶ時が来ます。

11 あなたが彼女の慰めの乳房から飲んで満ち足り、その豊かな乳房から吸って喜びを得るために。
12 主はこう言われる。「見よ。わたしは川のように繁栄を彼女に与え、あふれる流れのように国々の栄光を与える。あなたがたは乳を飲み、脇に抱かれ、膝の上でかわいがられる。13 母に慰められる者のように、わたしはあなたがたを慰める。エルサレムであなたがたは慰められる。14 あなたがたがこれを見るとき、その心は喜び、骨は若草のように生き返る。主の手はそのしもべたちに知られる。その憤りは敵たちに。」

母が赤ん坊を抱いて乳を与えているように、慰めを受けるエルサレムを描いています。この都には繁栄があります。ここのヘブル語はシャローム、すなわち平和とも訳すことのできる言葉です。限られた資源では、人々は争います。けれども、あまりにも多く与えられているので、その繁栄の中で人々が争うことをやめるのです。その繁栄をもたらすのが、世界からの国々の贈り物です。

ところで神が、アブラハムに「全能の神（エル・シャダイ）」として現れたことがあります。「創世17:1 わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。」その「シャダイ」の元々の意味が、「母の乳房」であります。乳飲み子が母に抱かれている姿を、神がご自分の名前としてあげておられるのです。それだけ全信頼を置き、完全に頼り切っている姿です。都の中に生

きている者たちが、そのように神に抱かれます。

パウロが、新しくイエスを信じたテサロニケのキリスト者たちに、自分たちがどのように彼らに接したのかを思い起こさせているところで、「母親のように」という言葉が出てきます。「Ｉテサ 2:7-8 キリストの使徒として権威を主張することもできましたが、あなたがたの間では幼子になりました。私たちは、自分の子どもたちを養い育てる母親のように、8 あなたがたをいとおしく思い、神の福音だけではなく、自分自身のいのちまで、喜んであなたがたに与えたいと思っています。あなたがたが私たちの愛する者となったからです。」母のように優しくふるまったとあります。それは、彼らのことがいとおしく思っていたからです。そして、福音を伝えることだけでなく、自分のいのちまで喜んで与えたいとまで思っていました。このような形で、私たちもキリストにあって愛されています。

3A 主の来臨 15－21

1B 火による裁き 15－17

15 見よ。主は火を伴って進んで来られる。その戦車はつむじ風のよう。主は激しい憤りをもって、怒
りを下し、火の炎をもって、叱責を下す。16 実に、主は火をもってさばき、 その剣で、すべての肉な
る者をさばく。主に刺し殺された者は多い。

事は、再び主が戻ってこられるところに戻ります。エルサレムが慰められるのは、主が戻ってこられてからですが、これはその手前の出来事です。主は、不正や悪を行う者ども。罪に対して火をもって裁きを行われます。そして、剣で倒れる者が多いとありますが、黙示 14 章には、馬のくつわの高さほどに、血の海ができると預言されて、19 章では神の大宴会として、猛禽が倒れた者たちの死体をついばむ場面が出てきます。

17「自分の身を聖別し、身をきよめて園に行き、その中にある一つのものに従って、豚の肉、忌む
べき物、ねずみを食らう者たちは、みなともに絶ち滅ぼされる。 ――主のことば。」

前回も見ましたが、忌まわしい異教の慣わしを行いながら、それこそが聖なる行為だと思っている、倒錯がここで描かれています。そういった、偽りの敬虔さに対して主は容赦ない裁きを行われるということです。

2B 逃れた者たちの宣教 18－21

18「わたしは彼らのわざと思いを知っている。わたしはすべての国々と種族を集めに来る。彼らは
来て、わたしの栄光を見る。

私たちは、60 章でエルサレムの上に、主の栄光が留まって、諸国の民が集まってくる幻を見ました。主が戻ってこられて、エルサレムにおられるので、それで世界から人々が集まってきます。

19 わたしは彼らの中にしるしを置き、彼らのうちの逃れた者たちを諸国に遣わす。すなわち、タルシシュ、プル、弓を引く者ルデ、トバル、ヤワン、そして、わたしのうわさを聞いたことも、わたしの栄光を見たこともない遠い島々に。彼らはわたしの栄光を諸国の民に告げ知らせる。

ここは、とても興味深い預言です。これは一義的に、終わりの日、患難の時代に、残りの民が世界の人々に福音を伝えていく場面であります。「彼らの中にしるしを置き、彼らのうちの逃れた者たち」とありますね。黙示録 7 章を思い出してください、そこには、神の印を押された、十四万四千人の神のしもべが出て来ていました。彼らは、イスラエル十二部族から出て来ています。そして、その後に、数えきれない人々が天で子羊の前に立っています。「7:9 その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。」このようにして、世界のあらゆるところから、人々が主を信じて、殉教して、天にいるのです。

ここで、「タルシシュ、プル、弓を引く者ルデ、トバル、ヤワン」とありますが、これらは創世記 10 章に、ノアの家族から分かれ出た民族や地域であります。タルシシュはおそらく、地中海の西の果て、スペインの北部辺りではないかと言われています。プルとルデは北アフリカです。プルはリビアのことですね。それから、トバルはマゴグの地にあるのではないかと言われています。エゼキエル 38 章に出てくる幻にもありますね。黒海とカスピ海の間に分布する地域です。そして、ヤワンはギリシアのことです。そして、聞いたこともない遠い島々とあります。これらは、イスラエルにとって、まだ聞いたことのないところであります。ですから、これは日本列島も含むでしょう。こうして、神のしもべとなっているイスラエル人たちが、世界の異邦人たちに、神の栄光を伝えていくのです。

そして、ここで使徒の働きを思い出すと、もっと興味深いことが分かります。エルサレムにいる、イスラエル人の弟子たちに聖霊が注がれました。彼らはエルサレムに留まっていましたが、主が約束されたとおり、サマリア、そして地の果てにまで、イエスの証人となりました。その時に、彼らの理解を超えた出来事が起こります。それは、異邦人がユダヤ教に改宗せずとも、信仰によって救われることです。彼らにとっては、終わりの日に起こることとして、イザヤの預言に、残りの民が世界に福音を伝えるとみなしていたことでしょう。しかし、その終わりのしるしが、聖霊によって今、彼らに与えられていたのです。ローマの百人隊長である、異邦人コルネリウスとその一家が、聖霊のバプテスマを受けました。そして、水のバプテスマを授けました。

ですから、聖霊の働きによって、私たちは今、終わりの日の幻の前触れを味わっている、と言ってよいでしょう。聖霊の働きは、すなわち御国の力が臨むことです。その一部を味わうことです。そして、確かに神の贖いの日には、私たちに御国を受け継がせる保証となっています。

20 彼らはすべての国々から、あなたがたの同胞をみな主への贈り物として、馬、車、輿、らば、らく

だに乗せて、わたしの聖なる山エルサレムに連れて来る――主は言われる――。それはちょうど、イスラエルの子らが穀物のささげ物をきよい器に入れて、主の宮に携えて来るのと同じである。

主が来られてから、諸国の民が、天の果てに散らされていた選びの民を連れてきます。全面的に、その帰還を支援します。そして彼らは、それを神からの命令、神への礼拝の一つとして考えて行います。

21 わたしは彼らの中からも、ある者を選んで祭司とし、レビ人とする――主は言われる。

主が地上に戻られると、神の国が立てられ、それから神殿も再建されます。そこにキリストが王として君臨されます。エゼキエル書には 40 章以降に、千年王国における神殿の幻が鮮やかに描かれています。そこで、いけにえも献げられます。それで祭司やレビ人も立てられるということです。

しかし、ヘブル書にしたがえば、これらはキリストが来られるまでのことであり、キリストが来たので廃れることが書かれています。しかし、それは罪が赦され、聖められ、永遠の救いを得るためのものとしてのいけにえの制度のことです。むしろ、罪が赦された、聖別を受けた、永遠の救いを成し遂げたことを、キリストにあって喜ぶ時、千年王国のいけにえの制度は、その救いの完成を喜ぶものとなります。ちょうど、聖餐式を執り行うように、キリストのなされたことを思い出すものです。

4A 新天新地 22－24

22 わたしが造る新しい天と新しい地が、わたしの前にいつまでも続くのと同じように、――主のことば―― あなたがたの子孫とあなたがたの名も いつまでも続く。

主は、すべてを新しくする幻を見せておられます。天地が新しくされます。エルサレムも新しくされます。黙示 22 章には、都にいる神のしもべたちが、神の名が額に記されていて、世々限りなく王となることが書かれています（4-5 節）。これが、救いが完成された姿です。新しいエルサレムの幻を見たヨハネに、主ご自身が、「見よ、わたしはすべてを新しくする。」と言われました（5 節）。

私たちキリスト者は、初めに信じた時から、この終わりの幻の中に生きるように召されています。「Ⅱコリ 5:17 ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」

23 新月の祭りごとに、安息日ごとに、すべての肉なる者がわたしの前に来て礼拝する。 ――主は言われる――

前もお話ししたように、イザヤの見た幻は、新約時代の使徒たちとは違って、キリストについての

奥義がまだ明らかにされていないので、終わりの日の幻がまだぼやけている部分があります。千年王国と新天新地の区別がぼやけているのが、その一つです。新月の祭や安息日は、千年王国の時は復活してユダヤ人の祭りが守られますが、新天新地においては、黙示 21-22 章を見るかぎり、そのような形跡は見えません。ですから、これは千年王国の時であろうと考えられます。

ここで特徴的なのは、「すべての肉なる者がわたしの前に来て礼拝する」ということです。安息日はユダヤ人たちだけが守っていますが、終わりの日、千年王国においては、異邦人も含むすべての人たちが守り、礼拝を献げます。これもいけにえと同じく、キリストの安息を示すのが安息日ですが、そのことを思いながら安息日を守るのです。

24 彼らは出て行って、わたしに背いた者たちの屍を見る。そのうじ虫は死なず、その火も消えず、それはすべての肉なる者の嫌悪の的となる。」

ここが、かなりえぐいですが、神の国における実際です。これまでもイザヤの預言の中に、モアブに対する神の裁き、エドム、そしてバビロンに対する裁きがありました。そして永遠の廃墟となることが預言されています。そうやって、神の国にいながらにして、背いた者たちが火の苦しみの中にいるのを見ることになります。

実は、これは新天新地においてもあります。実際に目で見るか分かりませんが、使徒ヨハネは、御使いから、新しいエルサレムの幻を見させられた後で、主自身が宣言されるのです。「黙 21:8 しかし、臆病な者、不信仰な者、忌まわしい者、人を殺す者、淫らなことを行う者、魔術を行う者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者たちが受ける分は、火と硫黄の燃える池の中にある。これが第二の死である。」そして、最後のイエスのみことばも、二つの道があることを厳かに教えられます。「黙 22:14-15 自分の衣を洗う者たちは幸いである。彼らはいのちの木の実を食べる特権が与えられ、門を通って都に入れるようになる。15 犬ども、魔術を行う者、淫らなことを行う者、人を殺す者、偶像を拝む者、すべて偽りを好み、また行う者は、外にとどめられる。」

イエスご自身の山上の説教においても、終わる時に、狭き門と、滅びへの広い道についてイエスは警告されました。モーセも、いのちと死のどちらかを選びなさいと命じました。このようにして、私たちすべてに、「いのちを選びなさい」という呼びかけがあります。私たちは、どちらを選ぶでしょうか？これが、イザヤ書、主こそが救いというイザヤの名前の通りのテーマが締めくくられるのです。